



大庭小学校だより

保護者と学校で子どもたちの成長を支える

「個人面談」にお越しの皆様ありがとうございました。本校では、家庭訪問と 2 回の個人面談により対面でお子さんの成長をお話しています。学校と家庭、地域では子どもたちが見せる顔は当然違います。人間誰もそうですね。子どもたちのいろいろな顔を知っていることは、かかわる大人にとって大切なことです。

時に、子どもたちは、大人から見て心配な様子を見せることがあります。将来の自立に向けて長い目で見ていくことが大切です。以下、不登校について書きますが、これは、不登校はだれもがなる可能性があり、お子さんがある朝「学校に行きたくない」と言った時の大人の心の準備を考えてのことです。

Q1 不登校の児童はどれくらいいるのですか？

令和5年度の不登校の児童生徒数は、全国で 29 万 9048 人、うち小学生は 10 万 5112 人です。小学生は全児童の中で 1.7%となり、この 10 年で 5 倍となっています。不登校児童は病気や経済的理由を除き年間 30 日以上欠席をした児童ですので、これに不登校傾向といわれる児童を加えると、その数はさらに多くなり、中学校では1割となる統計もあります。誰もがなる可能性があるという理由です。

※「病気や経済的な理由による者を除き、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるために年間 30 日以上欠席した者」を不登校児童生徒と文部科学省は定義しています。

Q2 不登校の原因は何ですか？

一つの原因とすることができない場合がほとんどです。「どうしていかないの?」と聞けば、何かしらの理由を子どもは言うかもしれませんが、それは氷山の一角で、本当のところは、本人にもわからない場合が多いのです。保護者はご自身の養育に原因を感じられる場合がありますが、これもわかりません。心のエネルギーが落ちている状態といえます。

Q3 不登校になった子はどのように変わっていきますか？



左の「心のエネルギーのグラフ」をご覧ください。登校がすべてではありませんが、心のエネルギーがたまるには、一定の時間が必要です。横軸の時間は、様々ですが、今子どもがどの段階にあるのかを見定め、その段階にふさわしい支援をする必要があります。

Q4 相談はどこにすればよいでしょう？

まずは学校にご相談ください。行きたくないと言っている学校が、一番の相談先というのは保護者にとってつらいかもしれませんが、だからこそ、日ごろから保護者と学校が顔を合わせて信頼関係を築くことが大切だと考えています。大庭小学校には、子どもと親の相談員、サポートワーカーあるいはオンライン授業など不登校に柔軟に対応できる体制があります。スクールカウンセラーによるカウンセリングを行うこともできます。その子にとって一番の支援を一緒に考えさせてください。

「行きたくない」理由が「〇〇さんとけんかしたから」とか「宿題をしていないから」などシンプルな場合、その理由を取り除けば、不登校未滿で解決する場合があります。お子さんの様子を見て、気になることがありましたら、遠慮なくご相談ください。

また、学校という場でなくとも、相談・支援の場はたくさんあります。不登校に限りませんが、ワンストップの相談先を記載します。ご連絡いただければ、ニーズにあった相談先をご紹介します。

松江市教育委員会生徒指導推進室 55-5652 松江市教育委員会生徒指導推進室 青少年相談室 21-7867 (末次町)

松江市こども家庭支援課(松江市こども家庭センター) 55-5484 (乃白町)

Q5 周りの大人はどうかかわる？

これまで書いてきたように、不登校は誰にでも起きる可能性があります。ですが、世の中の認識はまだそうはなっていないことがあります。お子さんを気分転換に外に連れ出そうとしたときに、周りの目が気になり、学校の時間の間は外出しにくいという方や校区内には出かけにくいという方がいらっしゃいます。「甘やかすな、無理にでも学校に連れて行かなくてはだめだ」といわれた方がいます。こうして保護者は、「他の子は学校に行っているのに、自分(の子)だけは…」と、どうしても考えがちになります。保護者が自分を責めると、子どもも自分を責めるようになります。

それゆえ、不登校の子どもとそこご家庭には、周りの大人がどうかかわるかはとても大切です。風邪の時、けがの時、学校にいけないのは当然ですが、それと同じように、今は、心のエネルギーが少なくなっているのだと見守ってくださいますようお願いいたします。このお便りをお読みいただいている全員の皆様へのお願いです。



今回は「保護者と学校で子どもたちの成長を支える」と題して、不登校について書きました。人生100年時代と言われる今の子どもたち、不登校の経験はその何十分の、何百分の一部です。学校に通うことだけを目標にするのではなく、長い目で見て、将来の自立に向け、人との関係性や学びにもう一度つながることができるようにすべての大人が考え、行動することが大切です。

繰り返しになりますが、不登校は誰でもなる可能性があります。だからこそ、心の準備をし、家庭と学校をはじめ大人どうしの関係性を深めておくことが大切です。

この号を書くにあたって、大いに勉強させていただいたのが、「NPO カタリバがみんなと作った 不登校—親子のための教科書」(今村久美著 2023 ダイヤモンド社)です。左のグラフはこの本が出典、おすすめです。この「カタリバ」が大切にしているのが、地域の方など年上の人とのゆるやかな関係性「ナナメの関係」です。教職員・保護者と子どもの「タテの関係」、同世代の子どもとの「ヨコの関係」と合わせ、学校内外の豊かな人間関係の中で子どもたちの自立への力を育んでいきたいと切に願っています。